

ライチョウを救え！

4班 布野智大 林宏樹 竹谷帆野波

目次

1. 新聞記事
2. 現状分析
3. 問題意識
4. 今後の対応策
5. まとめ
6. 参考文献

1. 新聞記事

「絶滅」のライチョウ、復活めざす 昨夏、中央アルプスで発見 国の計画始動／長野県

半世紀前から目撃情報が途絶え、中央アルプスでは絶滅したとされてきた国の特別天然記念物ライチョウの「復活計画」に環境省が乗り出す。北アルプスの乗鞍岳(3026m)で採取した有精卵を、昨年、中央アルプスで偶然見つけたメス1羽に抱かせて孵化させる。環境省によると、自然界では初の試み。将来的には個体群としてよみがえらせるのが狙いだ。

計画では、4月中旬～5月上旬、中央アルプスでメスの生存と営巣活動を確認する。4月中旬～6月上旬、ライチョウが生息する乗鞍岳で、複数の巣から最大6個の有精卵を採取。中央アルプスに運び、メスが五つ以上の無精卵を産んだ後に入れ替え、抱かせる。首尾良くヒナが生まれれば、母鳥から独立する10月まで追跡調査をする。

発端は昨夏、中央アルプスの木曾駒ヶ岳(2956m)で、登山者がメス1羽を見つけ、写真を撮ったこと。中央アルプスでは1969年以降、ライチョウの目撃例がなく、絶滅したとされてきた。撮影を受け、環境省は昨年8月に現地調査を実施。一昨年に産んだとみられる無精卵が残る巣や羽根などを見つけた。採取した羽根のDNA解析から近隣の乗鞍岳か、他の北アルプスの山から飛来した個体と判明。1年半以上、定着していると判断した。

環境省は、これを好機ととらえた。孵化の可能性を残したまま、ライチョウの巣から卵を採って運ぶ技術は確立している。野生の巣から卵を1,2個採った場合、メスは新たに卵を産み足すことなども判明しており、この方法なら乗鞍岳のライチョウ群への影響は少ないとも判断した。

ただ実際の復活に向けては、様々なハードルがある。中央アルプスで絶滅してしまった理由はよく分かっておらず、解明の必要がある。また地球温暖化の影響などで、高山帯を巡る環境が変化する中、天敵の存在の有無などの確認も重要だ。

計画に携わる、国際的なライチョウ研究者の中村浩志・信州大名誉教授は「ライチョウの保護活動にとって、今年は大事な年になる。まずは中央アルプスのメスが生き抜いてくれていることが大事。その上で抱卵による孵化で実績を上げ、復活につなげていきたい」と話している。

ライチョウはキツネやテンなどの天敵に捕食されるなどして、各地で数が減少。生息数は80年代の調査で約3千羽だったが、現在は2千羽以下まで減った。北アルプスのほか、南アルプス、火打山(新潟県)、御嶽山の各高山帯に生息しているが、絶滅の危機にさらされている。この状況を受けて環境省は2015,16年に乗鞍岳で採卵し、上野動物園(東京都)や大町山岳博物館(大町市)などでの人工飼育にも取り組んでいる。3月15日以降、一般公開される。(近藤幸夫)

近藤幸夫(2019)「「絶滅」のライチョウ、復活めざす」、『朝日新聞』,2019年03月14日付朝刊,25.

「絶滅」のライチョウ 復活めざす

昨夏、中央アルプスで発見 国の計画始動

半世紀前から目撃情報が途絶え、中央アルプスでは絶滅したとされてきた国の特別天然記念物ライチョウの「復活計画」に環境省が乗り出す。北アルプスの乗鞍岳（3026メートル）で採取した有精卵を、昨年、中央アルプスで偶然見つかったメス1羽に抱かせて孵化させる。環境省によると、自然界では初の試み。将来的には個体群としてよみがえらせるのが狙いだ。

計画では、4月中旬～5月上旬、中央アルプスでメスの生存と営巣活動を確認する。5月中旬～6月上旬、ライチョウが生息する乗鞍岳で、複数の巣から最大6個の有精卵を採取。中央アルプスに運び、メスが五つ以上の無精卵を産んだ後に入れ替え、抱かせる。首尾良くヒナが生まれれば、母鳥から独立する10月まで追跡調査をする。

発端は昨夏、中央アルプスの木曾駒ヶ岳（2956メートル）で、登山者がメス1羽を見つけ、写真を撮ったこと。中央アルプスでは1969年以降、ライチョウの

目撃例がなく、絶滅したとされてきた。撮影を受け、環境省は昨年8月に現地調査を実施。一昨年に産んだとみられる無精卵が残る巣や羽根などを見つけた。採取した羽根のDNA解析から近隣の乗鞍岳か、他の北アルプスの山から飛来した個体と判明。1年半以上、定着していると判断した。

環境省は、これを好機ととらえた。孵化の可能性を残したまま、ライチョウの巣から卵を採って運ぶ技術は確立している。野生の巣から卵を1、2個採った場合、メスは新たに卵を産み足すことも判明してお

乗鞍岳で採取 メスの抱卵・孵化狙う

り、この方法なら乗鞍岳のライチョウ群への影響は少ないとも判断した。

ただ実際の復活に向けては、様々なハードルがある。中央アルプスで絶滅してしまっただけではなく、分かっておらず、解明の必要がある。また地球温暖化の影響などで、高山帯を巡る環境が変化中、天敵の存在の有無などの確認も重要だ。

計画に携わる、国際的なライチョウ研究者の中村浩志・信州大名塾教授は「ライチョウの保護活動にとって、今年は大事な年になる。まずは中央アルプスのメスが生き抜いてくれていることが大事。その上で抱卵による孵化で実績を上げ、復活につなげていきたい」と話している。

ライチョウはキツネやテンなどの天敵に捕食されるなどして、各地で数が減少。生息数は80年代の調査で約3千羽だったが、現在は2千羽以下まで減った。北アルプスのほか、南アルプス、火打山（新潟県）、御嶽山の各高山帯に生息しているが、絶滅の危機にさらされている。この状況を受けて環境省は2015、16年に乗鞍岳で採卵し、上野動物園（東京都）や大町山岳博物館（大町市）などでの人工飼育にも取り組んでいる。3月15日以降、一般公開される。（近藤幸夫）

中央アルプス木曾駒ヶ岳の中岳山頂で撮影されたライチョウ＝2018年11月4日、登山者の中田昌宏さん提供



昨年8月、中央アルプス木曾駒ヶ岳で見つかったライチョウの巣と卵＝環境省提供

記事要旨

- ライチヨウは中央アルプスでは絶滅してたと考えられていたがメス1羽が発見された。
- 北アルプスから南下してきた個体
- 中央アルプスでの国のライチョウ復活計画が始動した
- 別のライチョウの卵を、中央アルプスのメスに抱卵させて孵化させる
- これとは別に野生で採取した卵を動物園などで人工的に孵化・飼育する試みがある。

発表を通して伝えたいこと

ライチョウは日本に古来から生息する鳥である。しかし、現在は絶滅の危機に瀕しており、生物多様性の観点から、繁殖、また、残していく必要がある。そのために対策を考える必要がある。

今回の新聞発表を通して、それを具体的に伝えたい。

2. 現状分析

ライチョウとは？

- キジ目ライチョウ科
最南端に隔離分布する亜種
- 成熟個体で全長37cm
- 特別天然記念物(1955年)
- 主な食物：高山植物の芽、種子、
昆虫類(春～夏)



<<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozou-shoku/raicho.html>> 4月15日参照

ライチョウの生態(1)

- ・現在の分布域
→頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、南アルプス
- ・生息数は減少傾向（信州大学）
1980年代：約3,000羽
2000年代：約2,000羽弱

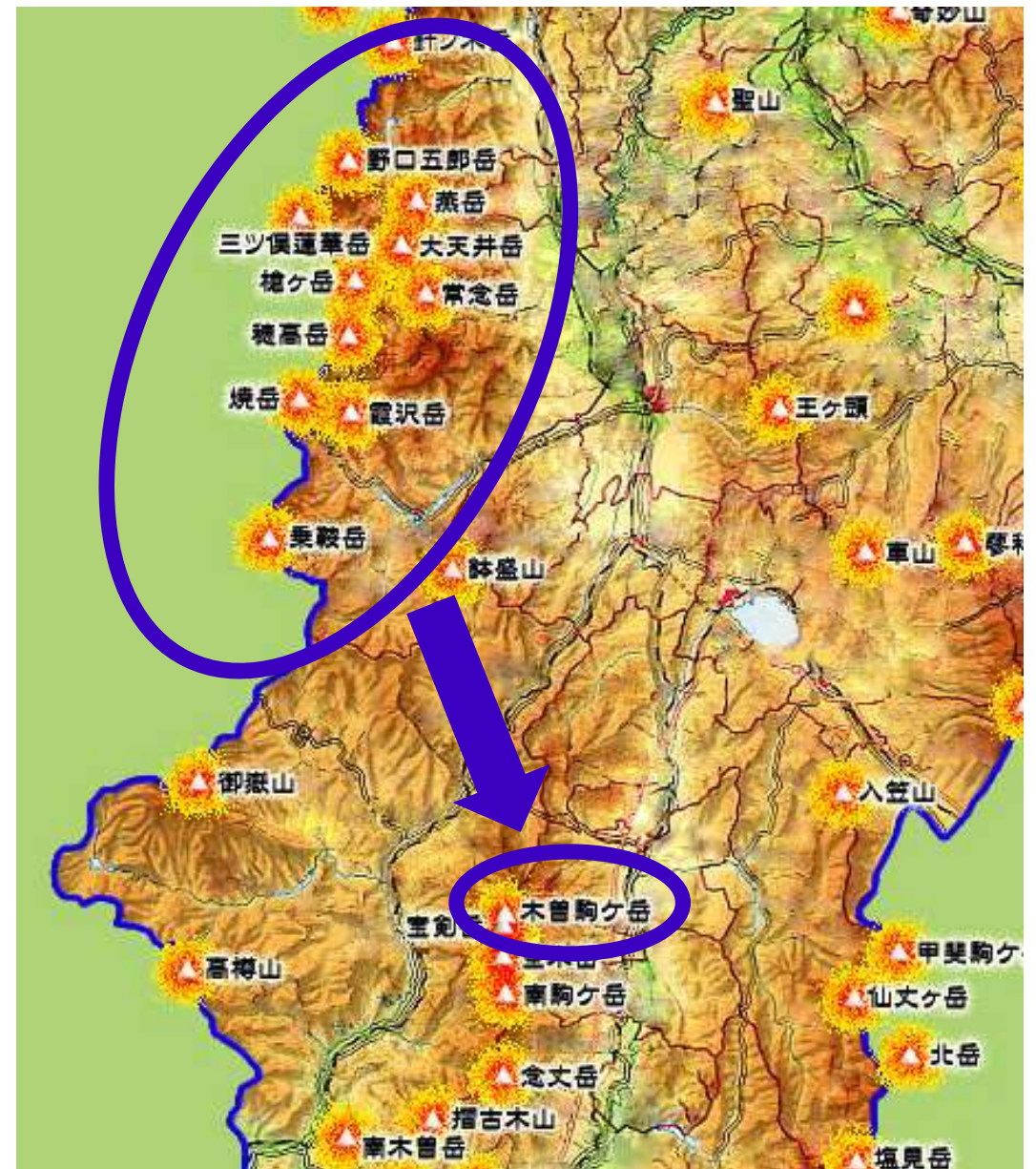
➡ 絶滅危惧 I B 類
(環境省第4次レッドリスト)



乗鞍岳、または北アルプス



木曽駒ヶ岳



<<http://www.naganogakuren.net/tozanMap/>>, 5月5日参照

ライチョウの生態(2)

- なわばりを作る
 - オスは自分のナワバリを岩や木の上から見張る
 - メスは6月下旬から6～8個の卵を産む
- 子育て
 - メス親がメインで行う
- 低い生存率
 - 9月上旬に若鳥へと成長。



しかし,育つヒナは約15%である。

<http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/kisyo_dousyokubutu/hogo/raityou.html>
4月15日参照

減少の原因(1)

- 捕食者の分布拡大(キツネ、カラス等)
- 従来生息していなかった種（ニホンジカ、ニホンザル等）の侵入
→高山植生が採食されることによる生息環境の劣化



SNS映え 野生動物の苦境

SNSが普及し、「インスタ映え」は流行語大賞にもなった。旅先で出会った動物をスマホで気軽に撮影し、すぐに友人らと共有できる。便利で楽しい反面、人目を引く写真を撮ろうと、野生動物にむやみに近づいたり、触れたりするなどエスカレートしている。SNSの普及により、野生動物保護の新たな問題が出てきた。

登山者向けのサイトに投稿されたライチョウを手づかみした写真。環境省提供



⑤ナマケモノを抱きかかえて写真を撮る観光客⑥観光客につかまれ撮影の被写体になるアナコンダ⑦いずれもNando Machado氏撮影、ワールド・アニマル・プロテクション提供

「ライチョウをつかんだ写真が投稿されている」
昨年7月、環境省信越自然環境事務所（長野市）にメールが届いた。
写真共有できる登山者向けのサイトに、富山県側の北アルプス・唐松岳で、何者かがひなを手づかみした写真が投稿されていた。
ライチョウを許可なく捕まえるのは、種の保存法などに違反する行為だ。野生動物にとつて、人につかまれるのは大きなストレスになる。また、親鳥が近くにいれば、つかまれたひなに気をとられていた間に、他のひなをキツネなどに狙われる危険もある。
信越事務所は富山県警などに相談したが、画像だけで違法性を証明するのは難しく、今回は法的対応を見送った。

ライチョウつかんで撮影／人慣れするヒグマ

一方で、ライチョウを見つけても見守るよう呼びかけるカードを配るなど登山者への啓発に取り組んだ。福田真・自然保護官は「野生動物はベツトと異なる。一定の距離を保ってほしい」と話す。
北海道・知床ではヒグマの人慣れが問題化しており、SNSの影響も指摘される。
知床で野生動物の保護や調査に取り組む知床財団は、2011～18年にインスタグラムに投稿されたヒグマの写真

約1万5千件を分析した。大半は動物園などで撮られたもののだが、約1300件は知床で野生のヒグマを撮影したとみられる投稿だった。
投稿は年々増加している。11年は数件程度だったが、「インスタ映え」が流行語大賞になった17年は400件超に。18年は11月中旬で600件を超えた。ヒグマにむやみに近づき撮影したとみられる画像もあるという。
同財団の能勢峰・研究員は

「人が接近することで、ヒグマが人に慣れつつある」と指摘する。ヒグマの目撃情報の増加も、そんな状況をうかがわせる。知床半島の斜里町での年間目撃件数は10年ほど前は年間600～800件程度だったが、15年以降は毎年1千件を超えている。
能勢さんは「人とヒグマの距離が近づくことで、ヒグマによる事故や市街地への侵入など、トラブルが懸念される」と話す。

「敬意抱き 節度を持って」
海外でも同様の問題が起きている。
英国の動物保護団体「ワールド・アニマル・プロテクション」の調査では、2014年からの3年間で、インスタグラムに投稿された野生動物の写真は4倍に増えた。うち4割超は抱きかかえたり、餌付けしたりするなど「不適切」なものだったという。
北陸先端科学技術大学院大学の敷田麻実教授（観光学）は「スマホの普及で野生動物が表現の題材になった。より良い場面を撮影しようと観光客の行為がエスカレートしている。自然や野生動物に敬意を抱き、節度ある付き合い方が重要」と話す。
また、観光客を受け入れる側の努力も問われると指摘。「人間と共存してきたから野生動物がその地域にいるという背景を事前に説明する機会を設けるなど、持続可能な形で見てもらう工夫が必要だ」と話している。（川村剛志）

インバウンドがもたらす問題

川村剛志(2019)「SNS映え 野生動物の苦境」、『朝日新聞』, 2019年4月4日付夕刊,4.

減少の原因(2)

- 登山客等の増加に伴う攪乱
- 山岳環境の汚染に起因する感染症の原因菌等の侵入
- 気候変動(温暖化)による営巣環境・植生等への影響



複数の原因が重なり合い、ライチョウが減少

保護の取り組み(1)

年度	保護政策
大正12年	国指定の特別天然記念物
昭和9年	中部山岳国立公園を設立
昭和24年	上信越高原国立公園を設立
昭和39年	南アルプス国立公園を設立
昭和59年	中部山岳国立公園を含む北アルプスを北アルプス鳥獣保護区に指定
平成5年	種の保存法に基づく国内希少野生動植物種にライチョウを指定
平成24年	ライチョウ保護増殖事業計画策定（文部科学省、農林水産省、環境省） ①生息状況等の把握 ②生息地における生息環境の維持及び改善 ③飼育下での繁殖及び再導入等の検討 ④普及啓発等の推進 ⑤効果的な事業の推進のための連携の確保
平成26年	第一期ライチョウ保護増殖事業実施計画策定
平成27年	妙高戸隠連山国立公園を設立（上信越高原国立公園から分離）

保護の取り組み(2)

- 国(環境省他)の取り組みの要旨
 - ▶ 保護増殖事業計画策定(平成24年)
 - ▶ 生息地の多くが国立公園や鳥獣保護区に指定
- その他の主な取り組み
 - ▶ 長野県希少野生動植物保護条例に基づく指定希少野生動植物(平成16年)
 - ▶ 国内の動物園6施設において、別亜種スバルバルライチョウによる飼育・繁殖の知見の集積

ライチョウ保護増殖事業計画

目的

- ・ 野生の個体の保護
- ・ 飼育下でのライチョウの繁殖
- ・ 繁殖個体の生息地への再導入

文部科学省、農林水産省、環境省(2012)「ライチョウ保護事業計画」,
<<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/pdf/jigyokeikaku/raicho.pdf>>
4月25日アクセス

ライチョウ保護増殖事業計画

平成24年10月31日
文部科学省
農林水産省
環境省

第1 事業の目標

ライチョウ (*Lagopus muta japonicus*) は、種ライチョウ (*Lagopus muta*) の中で、最も南に隔離分布する日本固有亜種で、本州中部の頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山及び南アルプスの高山帯で繁殖し、冬には亜高山帯にも降りて生活する。日本の山岳生態系を象徴する種であり、日本の生物多様性を保全していくためにも重要な種の一つである。

本亜種は、約2万年前の最終氷期に大陸から日本列島に移動してきて以後、山岳ごとに異なる遺伝子組成を持った個体群に分化していることが、ミトコンドリアDNAの解析から明らかになっている。また、最近の調査からは、山岳の個体群ごとに、一雄雌数、繁殖環境、餌内容、なわばりの広さ等に違いがあることが分かってきた。

本亜種の生息については、かつては、中央アルプス、白山、八ヶ岳及び御嶽山にも生息していた記録があるが、これらの山岳の個体群は絶滅している。ただし、平成21年には、白山で70年ぶりに雌1羽が確認され、その1羽はその後3年間にわたり生息が確認されている。

全国の個体数は、1984年以前に20年かけた調査から約3,000羽と推定されたが、同じ方法で行われた最近の調査では2,000羽以下に減少していると推定されている。

キツネ・カラス等捕食者となり得る種の本亜種の生息地への分布拡大、登山者によるごみの放置や不適切なし尿処理等の山岳環境の汚染に起因する細菌・ウイルス等の感染、開発による生息地の減少や分断、本亜種の生息地に従来生息していなかったニホンジカ等の野生動物の分布が拡大し、高山域生が採食されることによる生息環境の劣化等の様々な要因が本亜種の生息に影響を及ぼすことが懸念されている。また、長期的には気候変動により、本亜種の生息適地が減少する可能性も指摘されている。本亜種の生息を圧迫している要因を特定することは現時点では困難であるが、今後の調査分析によりその要因を明らかにし、その後の対策を講じていくことが大きな課題となっている。

5つの事業

1 生息状況等の把握

- (1)生息状況の調査及びモニタリング
- (2)山岳ごとの個体群の生態等の把握
- (3)個体群の維持に影響を及ぼす要因の把握
- (4)生息に適する環境等の把握

2 生息地における生息環境の維持及び改善

- (1)生息地における巡視等
- (2)従来生息していなかった野生動物等の侵入による影響の防止

3 飼育下での繁殖及び再導入等の検討

4 普及啓発等の推進

5 効果的な事業の推進のための連携の確保

3. 問題意識

問題①：複数の減少原因の存在

- 各生息地域によって、原因にばらつきが存在
- 原因が特定できていないため、どのような対策がベストなのか不明



各生息地域ごとに、減少原因に合う対策を行っていく必要がある

<生息環境圧迫要因調査結果>

環境省「第一期ライチョウ保護増殖事業実施計画」によれば、ライチョウの生息環境を圧迫する要因として、

- ① 捕食者となり得る種（キツネ、カラス等）がライチョウの生息地へ分布を拡大することによる影響【捕食者による圧迫】
- ② 従来生息していなかった種（ニホンジカ、ニホンザル等）が高山帯に侵入し、高山植生が採食されることによる生息環境の劣化【侵入種による圧迫】
- ③ 山岳環境の汚染に起因する感染症の原因菌等の侵入【感染症による圧迫】
- ④ 登山客等の増加に伴う攪乱【登山者による圧迫】
- ⑤ 気候変動による営巣環境・植生等への影響【温暖化による圧迫】

を挙げている。本調査では、生息南限地の① 捕食者による圧迫、② 侵入種による圧迫、⑤ 温暖化による圧迫について、取りまとめた。

（下表は、静岡ライチョウ研究会及び長野県環境保全研究所が共同で実施した独自調査の結果も反映しています。）

捕食者による圧迫	・現地調査で確認された、ライチョウを捕食するとされている鳥類は、イヌワシ、チョウゲンボウ、ハシブトガラスの3種。ライチョウを捕食する可能性がある鳥類は、ノスリの1種。 ・現地調査で確認された、ライチョウを捕食するとされている哺乳類は、ニホンザル、キツネ、テン、オコジョの4種。 ・哺乳類の糞を採取し（ニホンザル、キツネ、テン）、内容物を分析した結果、ライチョウを捕食した痕跡は見つからなかった。
侵入種による圧迫	・現地調査で確認された、高山帯に新たに侵入し、ライチョウの生息環境を劣化させるおそれのある種は、ニホンジカ、ニホンザルの2種。
温暖化による圧迫	・ライチョウ営巣地の植生調査の結果、営巣することが多いハイマツ群落が優占しているものの、群落内にはオオシラビソ、コメツガなどの亜高山帯針葉樹林を構成する木本類も確認された。

上記のように、生息南限地では、ライチョウの生息環境を圧迫している可能性がある推定要因として、捕食者による圧迫や侵入者による圧迫が挙げられますが、現在はライチョウの生息数を減少させるまでの要因には至っていないと推測されます。

そのような中、今後地球温暖化が進行することで、ライチョウの生息環境を悪化させることが、最も懸念されるマイナス要因であると考えられます。

例：南アルプス南部（静岡市域） ライチョウ生息状況等の調査結果 （平成25～30年）

→**捕食者や侵入者**による圧迫は減少
要因には至らず

**温暖化による圧迫が、
最も懸念される要因**

静岡市(2019)「南アルプス南部（静岡市域）ライチョウ生息状況等調査の結果とりまとめ」,p.3

< <http://www.city.shizuoka.jp/000811696.pdf> >, 4月22日参照

問題②：人工飼育の困難さ

- 飼育環境

低地でのライチョウ飼育(特にヒナ)は非常に難しい

- えさ

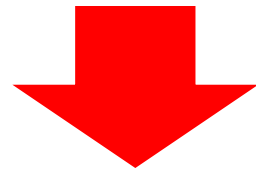
野生個体は高山に生息する植物を食べている

- 感染症対策

細菌の活動が抑えられる高山にくらすライチョウ
→感染症に弱く、殺菌・消毒の徹底が必要

問題③：保護活動の財源確保

- ・ライチョウの生息環境の保護
- ・人工飼育の取り組みの拡大 など



保護増殖事業計画の5つの事業を達成するには、
財源確保の問題をクリアする必要がある

4. 今後の対応策

Q. どのように財源を確保するか？

➡ 国立公園において、**入域料**を導入する

{ 妙高戸隠連山国立公園⑬
中部山岳国立公園⑰
南アルプス国立公園⑲



< <https://www.env.go.jp/park/parks/index.html> >
4月22日参照

入域料導入への取り組み

妙高戸隠連山国立公園（妙高山・火打山）における入域料等に関する社会実験の結果について

環境省と妙高市が協力し、妙高戸隠連山国立公園（妙高山・火打山）において実施いたしました入域料等に関する社会実験が終了しましたので、結果をお知らせいたします。

1 実施期間

平成30年10月1日（月）～10月21日（日） 5:30～17:00（一部 8:00～16:00）

2 実施箇所

新潟県妙高市 妙高山・火打山の3つの登山口（笹ヶ峰登山口、燕温泉登山口、新赤倉登山口）

3 社会実験の結果

①自然環境保全協力金について

- ・各登山口に係員を配置し、自然環境保全に係る協力金（500円）の寄付を依頼（一部、募金箱の配置のみ）

協力者数 : 2,963人（登山者以外の協力者も含む）

金額 : 1,460,277円（500円以外の金額も受付）

協力率 : 75.1%（登山者数3,459人 協力者数2,963人）

②アンケート調査について

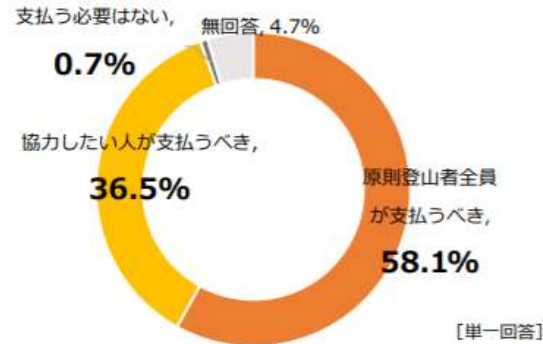
- ・下山された方に、自然環境や登山道に関するアンケート調査を実施。

環境省HPより抜粋

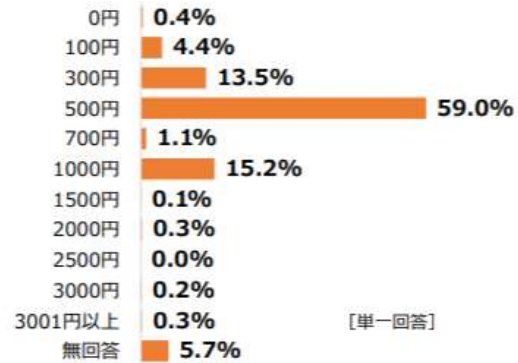
<<https://www.env.go.jp/press/106156.html>> 4月22日参照

3. 今後の妙高山・火打山における協力金制度の導入について

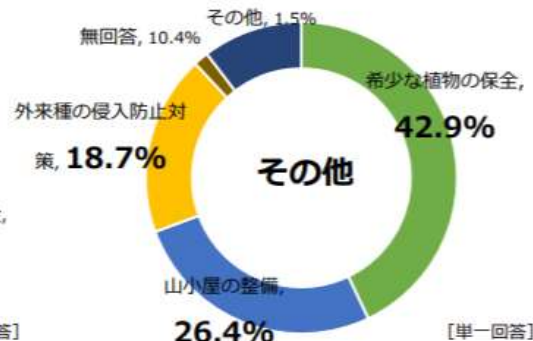
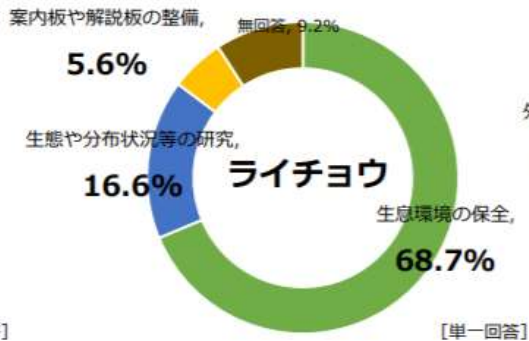
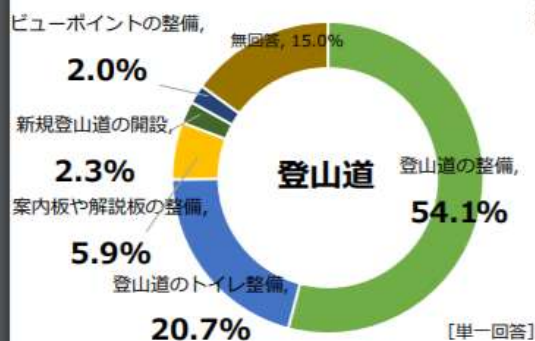
協力金の支払い義務 (n=1,486)



支払ってもよいと思う金額 (n=1,486)



協力金を支払ってもよいと思う使い道 (n=1,486)



4. 回答者属性

- 性別 : 男性62.2%、女性32.4%、無回答5.5%
- 居住地 : 県外70.7%、県内22.9%、無回答6.4% ※市内2.8%
- 登山頻度 : 年に1回未満3.0%、年に1回程度4.7%、年に2～5回26.6%、年に6回以上59.4%、無回答6.3%
- 妙高山火打山経験 : 初めて52.2%、2～5回34.0%、6回以上7.7%、無回答6.1%

アンケート結果

環境省(2018)「アンケート調査結果概略」,p.2

< <http://www.env.go.jp/press/files/jp/110315.pdf> >, 4月22日参照

試算

- ・ 入場料を500円とする
- ・ 3つの国立公園で入域料を導入
 - 妙高戸隠連山：512万人
 - (平成28年度) 中部山岳：828万人
 - 南アルプス：307万人

環境省(2019)「国立公園利用者数（公園、年次別）」
<http://www.env.go.jp/park/doc/data/natural/data/naturalpark_6.pdf> 4月22日参照

$$500円 \times (512万 + 828万 + 307万) = 823,500万円$$
$$= 82億3,500万円$$

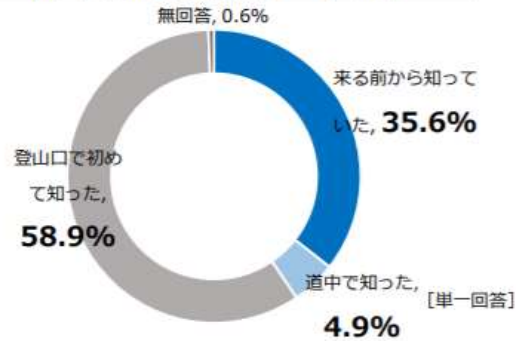
アンケート調査結果概要（速報値）

1. 調査概要

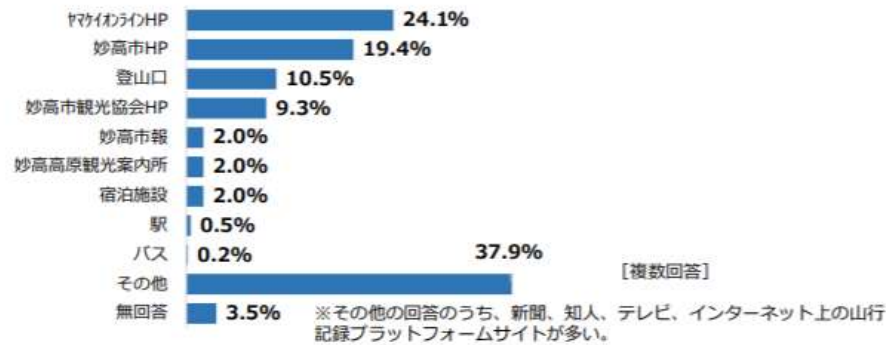
- 実施期間：10月1日（月）～21日（日）
※10月1日の午前中は台風の影響により中止。
- 調査場所：笹ヶ峰、燕温泉、新赤倉 各登山口
- 対象者：妙高山・火打山への登山者
- 調査方法：下山時に調査票を配布 ※現地もしくは後日郵送にて回収
- 対象者数：2,837人
- 回収数：1,486人 ※現地回収1,149人、後日郵送回収337人
- 回収率：52.4%

2. 今回の社会実験について

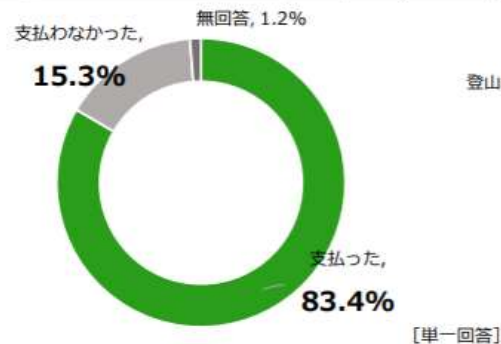
社会実験の認知度（n=1,486）



社会実験の実施を知った場所（n=602）

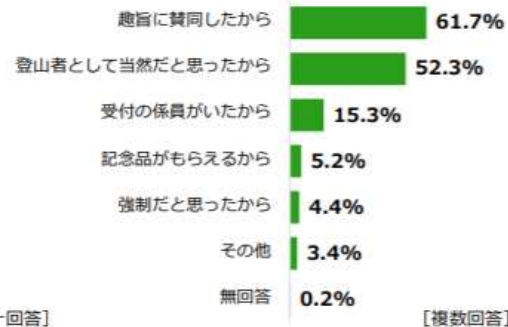


協力金の支払い状況（n=1,486）

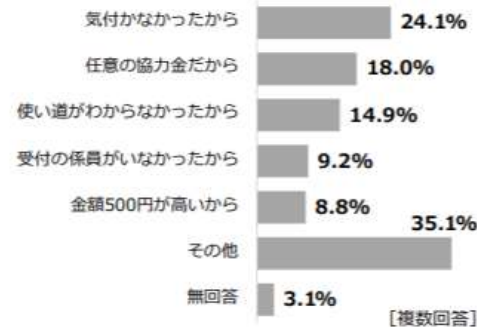


※実際の協力率は75.1%であったため、回答は実際よりも支払った人の回答に偏りがある。

支払った理由※上位5つ（n=1,240）



支払わなかった理由※上位5つ（n=228）



アンケート結果(2)

環境省(2018)「アンケート調査結果概略」,p.1

< <http://www.env.go.jp/press/files/jp/110315.pdf> >, 4月22日参照

入域料を導入すれば、十分な財源を確保できると見込める

- 生息環境の維持及び改善
 営巣場所、隠れ場及び餌場を利用されるハイマツ林等の保護
- 長期的なモニタリング
- 野生動物等の侵入の防止策
- 人工飼育
- 国立公園内での巡視、制札の整備等
- 普及啓発等の推進

→ 十分な財源を確保することで、さまざまな保護活動を行っていくことが可能

動物園等での人工飼育のための財源は？

- 政府等からの援助

入域料で得た収入の一部を援助に充てる等

- 動物園独自の取り組み

例：富山市ファミリーパーク

～2018年3月1日までにクラウドファンディングで、
1,000人以上から約2,600万円集める

クラウドファンディングトップ > 地域 > 地域文化 > 残そうニホンライチョウ！絶滅の危機にあるライチョウを救いたい > 新着情報 > プロジェクト終了の報告 - ありがとうございます...

残そうニホンライチョウ！絶滅の危機にあるライチョウを救いたい

富山県 地域 地域文化 観光 環境保護 動物 寄附型



富山市ファミリーパーク 園長 石原 祐司

寄附総額

26,265,000円



目標金額

10,000,000円

寄附者数

1,174人

残り日数

終了しました

寄附型

All or Nothing

プロジェクトが成立しました！

このプロジェクトは
2018年2月28日(水)23:00 に成立しました。

< <https://readyfor.jp/projects/nokoso-raichio-familypark/announcements/72574> >, 4月18日参照

6. まとめ

ライチョウの減少を食い止めるために、まずは、各生息地域ごとに減少原因を特定し、有効な対応策を決定することが急務である。ただし、ライチョウの生態についてはまだまだ不明な点が多いため、現代段階では、それは困難と予想される。

今後の取り組みについては、ライチョウについての保護活動・研究を両立させていくことが重要である。これらには財源の問題があるが、ライチョウ生息域の国立公園で入域料を導入し、財源確保を図るという政策が有効ではないかと考えられる。実際に、そういった試みも始まっている。

国としての本格的なライチョウ保護活動はまだ始まったばかりであり、今後の動向に注視していきたい。

6. 参考文献

- ・ 川村剛志(2019)「SNS映え 野生動物の苦境」,『朝日新聞』,2019年4月4日付夕刊,4.
- ・ 環境省(2018)「アンケート調査結果概略」,p.1,2 <<http://www.env.go.jp/press/files/jp/110315.pdf>> 4月22日アクセス
- ・ 環境省(2017)「国立公園利用者数（公園、年次別）」,
<http://www.env.go.jp/park/doc/data/natural/data/naturalpark_6.pdf> 4月21日アクセス
- ・ 環境省(2019)「国立公園一覧」,<<https://www.env.go.jp/park/parks/index.html>>4月22日アクセス
- ・ 環境省(2018) 「妙高戸隠連山国立公園（妙高山・火打山）における入域料等に関する社会実験の結果について」,<<https://www.env.go.jp/press/106156.html>> 4月18日アクセス
- ・ 環境省(2019)「ライチョウ」,<<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/raicho.html>>
4月15日アクセス
- ・ 近藤幸夫(2019)「「絶滅」のライチョウ、復活めざす」,『朝日新聞』,2019年03月14日付朝刊,25.
- ・ 静岡市(2019)「南アルプス南部（静岡市域）ライチョウ生息状況等調査の概要」,
< http://www.city.shizuoka.jp/041_000197.html> 4月15日アクセス
- ・ 静岡市(2019)「南アルプス南部（静岡市域）ライチョウ生息状況等調査の結果とりまとめ」,p.3
<<http://www.city.shizuoka.jp/000811696.pdf>> 4月22日アクセス
- ・ 中部森林管理(2019)「希少野生動植物の保護ライチョウ」,
<http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/kisyo_dousyokubutu/hogo/raityou.html>
4月15日アクセス

- ・ 東京ズーネット(2019) 「上野動物園のライチョウ保護への取組み——第5回「上野動物園でのこころみ」」, <https://www.tokyo-zoo.net/topic/topics_detail?kind=news&inst=ueno&link_num=25500> 5月5日アクセス
- ・ 富山県(2015)「立山室堂ライチョウ見守りネット」,<<http://raicho-mimamori.net/jp/conservation/>> 4月15日アクセス
- ・ 長野県山岳連盟(2019) <<http://www.naganogakuren.net/tozanMap/>>, 5月5日アクセス
- ・ 文部科学省、農林水産省、環境省(2012)「ライチョウ保護事業計画」, <<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/pdf/jigyokeikaku/raicho.pdf>> 4月25日アクセス
- ・ Ready for <<https://readyfor.jp/projects/nokoso-raichio-familypark/announcements/72574>> 4月18日アクセス